月漁紀

石塚豊芥著

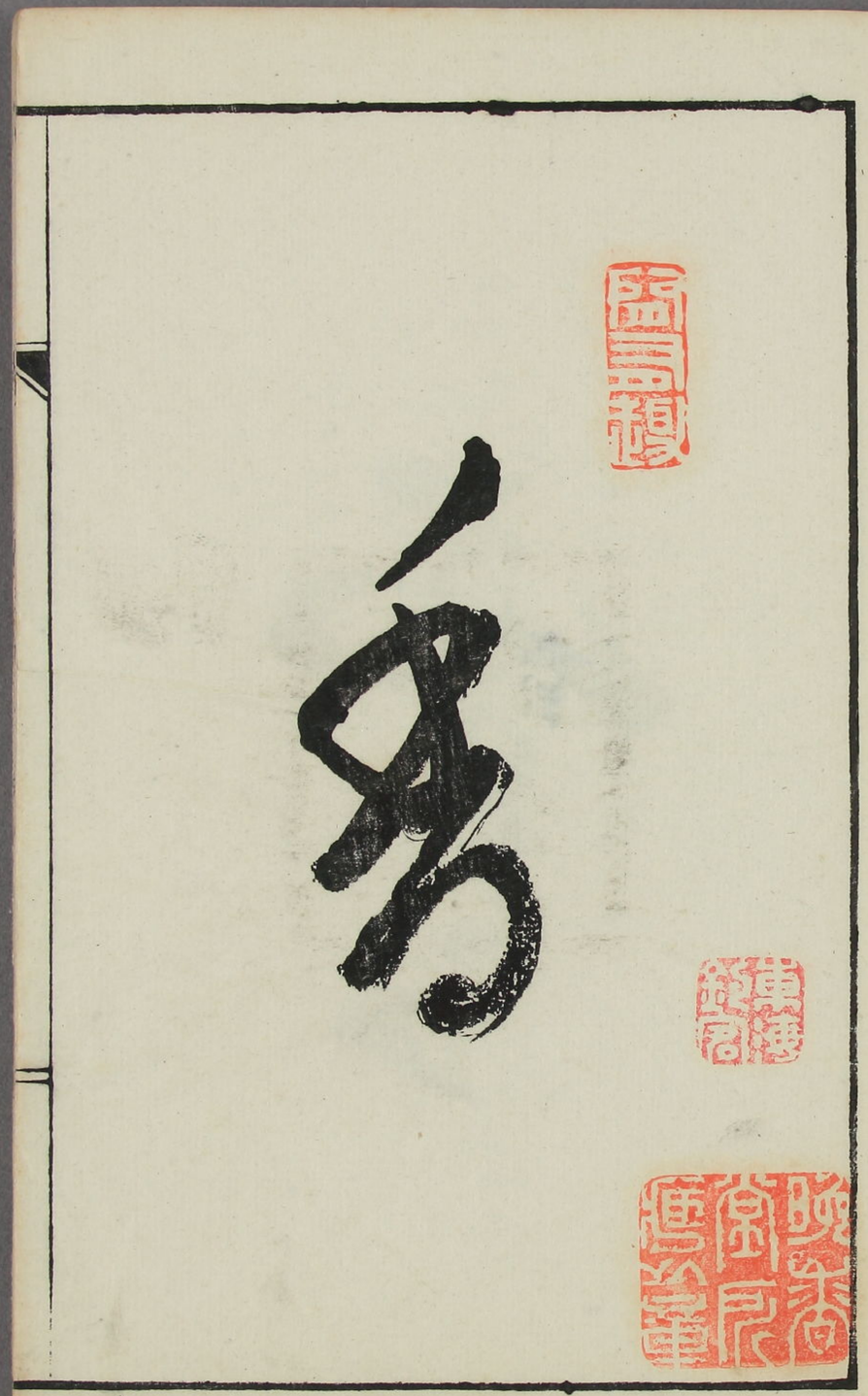
特別
イ 4
3159
C85

二品大勲位晃親王殿下御題字

月瀬紀行

平安　不識庵聽秋著

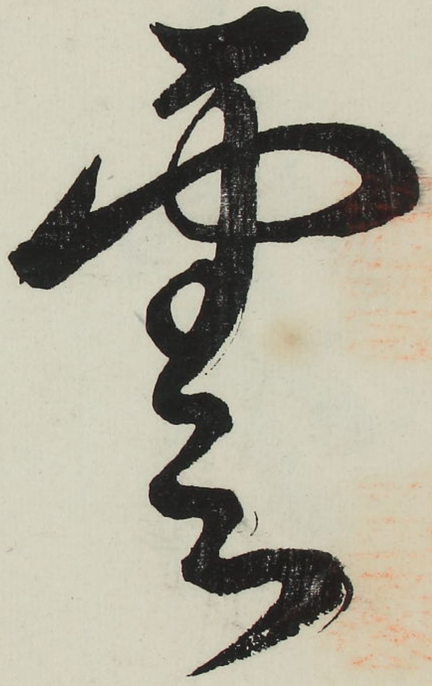
14
3159
C85



版權所有

時於二十年九月十八日

二品大憲信晃親王



山の頂谷の奥も
うぐひすの野辺に
遅梅知るらん
月の瀬の
梅ぞ咲つゝ

月瀬紀行序

余嘗遊大垣訪小原鐵心於其無何有莊時方梅花盛開即設筵花下而飲座間有一年少行酒者即席賦詩數章奇警驚人鐵心曰是吾家千里駒也問其名曰聽秋後不相見十餘年錢心下世聽秋為俳諧人一日來謁曰吾性多病遂廢学業

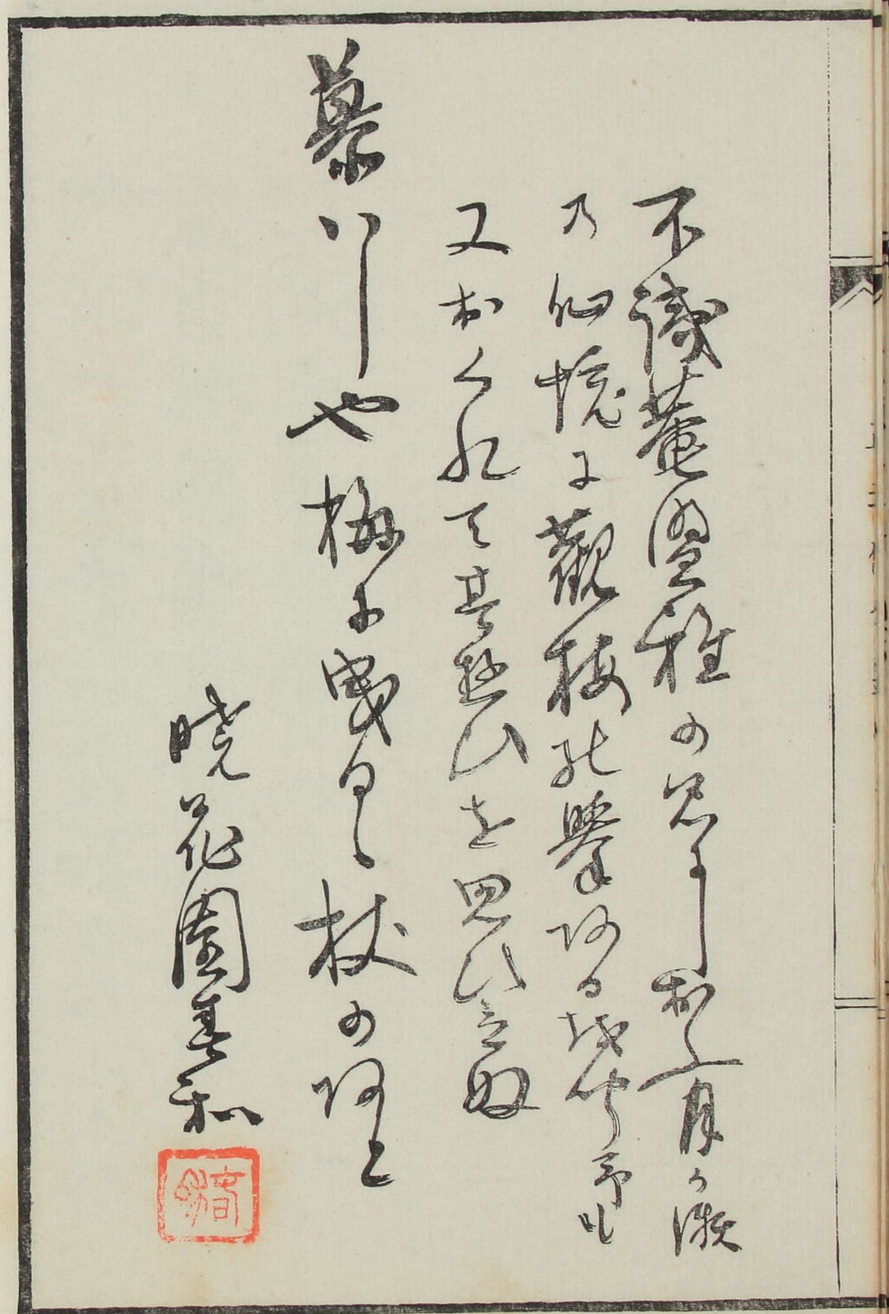
但放脚於山水託興於風月聊以娛
生有近著月瀨紀行乞予為序披
而閱之其辭之芳如梅花思之清
如雪月而篇章曲折之妙使人神
遊乎梅花國萬玉堆中余拍案
嘆曰有是哉奇警如是何復論
詩与俳諧哉但憾不重起鐵心相
共擧巨杯劇賞之也

明治二十年十一月如意山人谷
鐵臣撰并書于乾坤清氣樓
之南窓下

正五位谷鐵心君

不識菴主聽秋君者美濃大垣人也明治三年余在家
鄉其居相近時到其邸共讀史書課餘偶得見君之詩
稿其一絶句云男兒立志何畏死五大洲中有墓田此
足以觀君之素志矣君嘗修英學于大學南校蚤欲遊
海外其期在近偶罹肺疾不果其行遂不復事學業爾
後移居西京友山水娛風月好俳諧業已爲宗匠云余
也与君分手之後移住南越寄奔走東西二京之間九

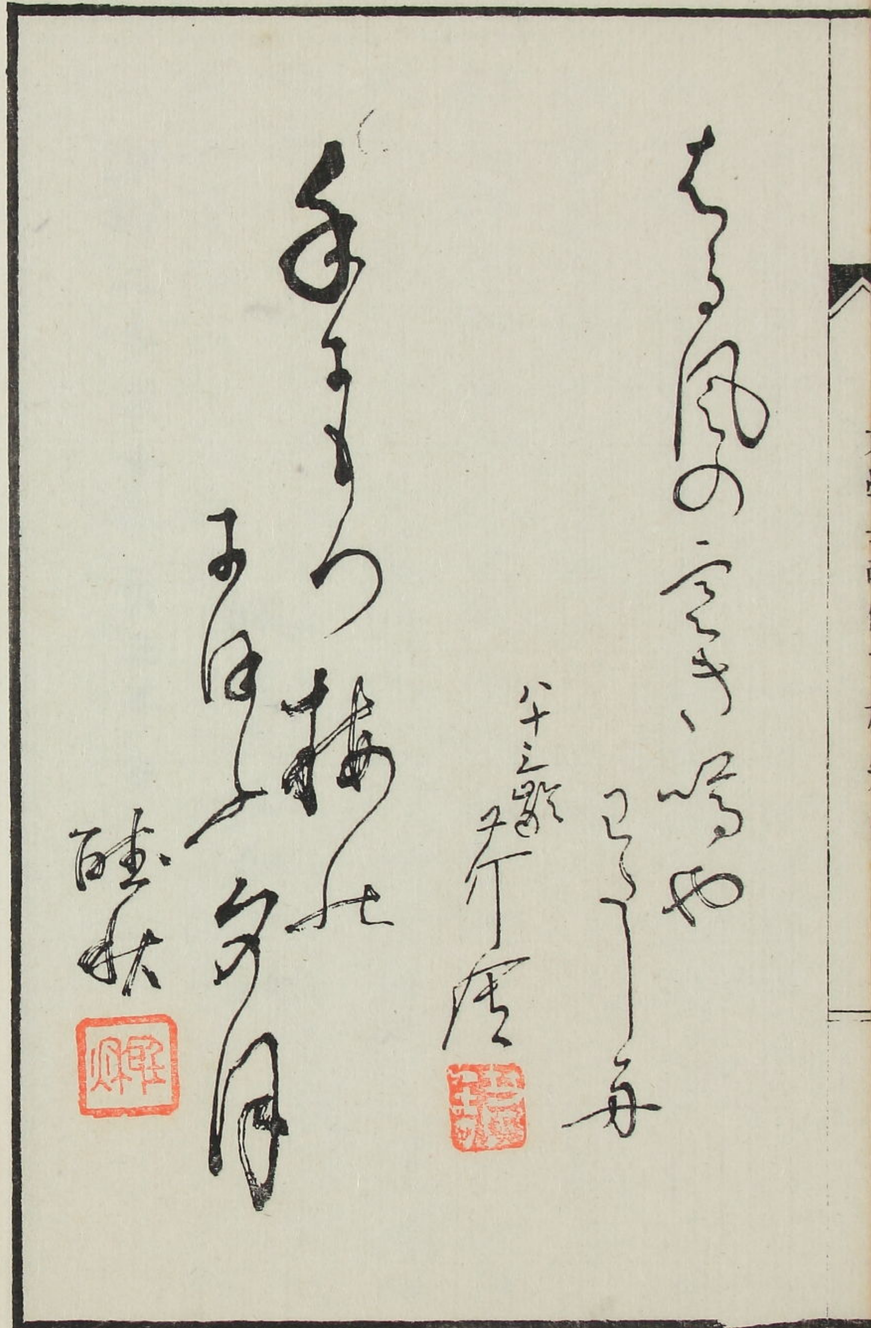
月瀨紀行序



年遊英國留學七年餘十七年帰留東京今年遊印度
支那帰住西京始聞君在此地其居亦不甚遠然未及
相會君已介小川果齋君寄余序其月瀨紀行篇章之
妙已詳于如意山人之序余復何言抑令伯鐵心小原
大夫生平能与人交蓑洲毛苡二詩備居常以詩酒相
交者也十數年間三人皆去世矣果齋君者蓑洲師之
第二子而余即毛苡之第三子也共離家鄉在西京復
結文字之交可不謂風流因緣乎哉乃不辭而書

明治二十年十一月三十日

碩果生南條文雄



丁亥
明治二
十年

金子錦二云傚元禄潤
稽集明治之文運意
匠更大

小川果齋云奇語与
小原鐵心先生天地
落眉間句為鼎立使
人想望其風采

関遂軒云乾坤無住
天地我庐好一對可
謂蕉翁再生

又云開卷第一先得
此好句想見苦唇一
片笑待主人早四

月瀬紀行軒の春

平安　不識庵聽秋　著

和州の香安畧を観るに非ざんば妖生あんを梅花を説へきと山陽翁の芳跡の一度咏賞するより自の渋を遊ばんとも思ひ年こゝ切あるを花頃を賞する事あらざる幾年の星霜を過せしかの今年伝樂の門生等相図梅賞の社を設置せんとて我輩に杖を曳きくはなりぬ芳花蕉翁の芳跡を偲の杖の打ちて乾坤無住同行二人と笠に樂書せらるゝを思へば人の世仰ぎる猿に似せと余が拙筆の裏に天地我廬同行茅舎とかゝつ筆を明治丁亥三月二十五日旭日三竿萬壽山麓の茅庵を出るとき

曙すゝゝる毒ある色れを梅の花　聽秋

逢坂山

果云心月豁然先見天地我塵氣象

遂云自竹外句脱化来尤覚簡明

粟津

錦云千載仰其威灵幾千万人

遂云解釈無名庵来歴去太明瞭

果云清麗

夢うつゝこの門をこゆる野　角茶

白川橋の東より車よりくだりて急ぎ世を御懐古の地に

遥拝し独り昔の古事を慕ひ跡水上事を偏記し人

智の開けしを驚き逢坂山を越せば大津市街は魚鱗の

如く琵琶湖の南より連り日枝は高く聳えて雲よりも高き

ひ富士の嶺と呼ぶ三上山は湖の東より笑を含みて比叡は

湖を隔てて同志の白く美矢より接ぎ

比叡ぬ山はかすみうるおの風

粟津義仲寺より至る柴門より数十株の芭蕉は茂り

繁りて秋風に翻り西面の芭蕉堂あり西風宗師の額

を掛く二條右大臣の筆跡あり近つきて芭蕉翁の肖像

我ねぎて凛々たり在りぬし奉扇會より翁忌近

八月を常携せりつゝ世より比類なきの形容なり本廟

は東に小なるあり碑の文字は其角なりとぞ本末

墓碑の墓あり後に名庵あり名庵あり後に淀鶴を尋ねむと

義仲戦没の後に愛妾巴は和田義盛に嫁し亡君の乱

を分娩し鎌倉を脱し再び粟津に帰り公の墓の後

に庵を結び菩提を弔ひ我名を人に明さるるより誰

云ふ名名庵と呼び庵の名ありぬ後遠年を経

祖翁枝を去るに止め西秀曲袈裟なり古き庵を補修し

翁の霊位あり保せり本堂は尚蓑創建風羅坊芭蕉老人

の霊位あり保せり門下十哲の霊位あり幻住庵の記

蕉式三の條字の色紙短冊等は貴跡数多あるも只桂

の枝のみを残しあり安政四年六月四祖の災に加り烏有と

湖南芭蕉堂圖 鐵齋 應史

瀬田

錦云追懐之情溢于言外

遂云一句中寓無量悲酸

あり情もあるかのごとし今井茶屋より自松を向の松も
数百年の星霜を経るよし一片の煙にはかなきぬと
尾上作者老の苦心を写或は無を或は数を似せて
別に及ひ去る

来るかりんよ きくや和しく せ　能秋
雲も情よ 寺屋の 蓑出　名苦
梶の匂 さかしらよ 雨は雪を立て　物象

瀬田橋上より車を延めて紫式部の源氏の巻を綴り名山
名川おのよ突出し琵琶湖より望るを見る遠近の青嵐色々
影を瀬水に移倒しく鮮明なり彼の蘇東坡の西湖
比しく西湖は彩まれる此風光は天下無比と思ふ
時を移せり

蜆汁

錦云春色満山水宜停舟

景云雨奇晴好能料満前想見老兄掀髯得意之状

又云蒼髯叟豈屑秦皇封者乎今得此名句應群賜之尊也

遂云得此一句木公之栄有餘何啻秦皇大夫封哉

瀬田の名うたを旅客船屋の玉地は社員山賀を撰へ給文れは共蜆汁を
吸ひ椀を舐け盡餅を喰ひ紅葉の枝を点せるかの
きみを思ひ出るよ葉しく瀬田を辞し大戸川の流よりあ
星軒を百人の端艇うかく枝を地よ来せく拙ち見ゆる
しかを伺めく見歌されは忽恋のおもを隠蔵し胸
雨降東北人詩しく木蔭よ時るを待つ秦の世は形は年を
蔽ひ大夫よ封せく地しく例ふるの今世和を我を眠くしへ
しく殘ゆるの力をく共一句をの外しく稗よ事しく考る

美百和甲　蓋この方　松　ものし

共ひしう不動阪よう世ひ岩を打の洗ふ水は眼下る向く清音
るの杉林は遠近よ多しく名種迂曲金の行をしく悲景人物

不動坂

錦云遊于俳宗最可

遂云一句天籟蓋得之古人意者

の思ひをなすべし むかしの宋脇よりなすべき怪岩あり石碑の左右に
突出し 松よりなるべき樹木もなく 翠よりなるの芝叫もなく
奇絶の風光を呈せり 強ひて遊ばれハ移檜の老樹天に奉し
日を蔽ふ者幾百数を知らず 神山本尊不動明王の石柱
あり 殆伽羅制吒迦の両尊なる巨大なる石を以て安置し道
の左右に立列せる又数十坪を移せる伽列に建て堂宇風
雨に晒せて古色を帯び石社八人跡に廣けり新宮を毒
蛇嚢中を移り殺賊を敬賽せ今如来に神道あり仏法
何り聖教あり各彼り経を駁し互に長を誇り実に宗教
我国のみならず
をいろ〳〵 要ハ甲一峰の花
畑村より作原に出ぬ社あり伊神を祭り一ハ和

果云僅々十七言包括深山幽谷阪路羊腸之状何等筆力

錦云禅苔得趣

又云美行感止句意妥當

御齋峠

さきに紀氏の塚通明神の古墳をかすめ過て拜す
小川を越へ黄昏多羅尾の村端に加へハ社員燈を照し迎へ
て遥の知へをなす 千秋庵に着き社員集會し杯を仍け若
よ年事を祝す
彼方の〳〵なる つゝみ叫 や 高の名 豊岳
先うせ一 さきもかゝ けめ 板ハ也 駐秋
二十六日晴 社員豊居に つきあるに依て男女月子八父子代
て自の陳祝の徳行を
石の〳〵 徒ふ者ふの物名 この郷 空居
多羅尾村を辞し 移鬼岐阪八十八丁のぼりて一峠を登る
さきに帰路の苦辛を思ひ出せり 岩壁高く絶壑石四四張
の左右に列し城郭の畳石に似たり〳〵 古松峰より梢に

又云慷慨凛乎

果云凄愴

遂云一誅之下已知梅溪在迩

又云斬新

錦云遇倹破夢之仆可掬跡難舁夢之労可憐

連り杉彩の風くるを鯨波の起るく所こゝ者大友の王子
うち出の軍を防き給ひ一阪ちゝ里人の語るを聞くの
を退憐しを想憐止を

紅一ちる杉の雪や寒し

西山の雲よりて西村を過き川の磧よ玉ゝ金烏八南天
よかり東風飯室を八ちれ黄鶯を吐て梅香を動し
竹輿八ゆく見ぬ月出の夢を乗せて峰軒夢中よ何山よ
遠を

黄昏よ雲ゝ新し雲の梢 能秋

杉えおくり迎ゝよ 吉柳 吉月

与梁伴明友生烈よ飯を喫し紫田崇法郎と遊遊を中人
杉系の紀色ゝを以て月伴を朝潮大外白梅等

遂云極力描写形容殆如目覩之就中銀世界中水晶溪七字能写其実

錦云暗下亦殺人来是別世界

の数村を過り石折村よ玉ゝ久仏西山よ春く尾山の梅
林を明日よ孤しを村ゝより長引よ玉ゝんとされ八蒼風
八清を送て梅舟の迎よあるを猶し晩鐘八響長し
て山寺の法よ法を初る黄昏よ一月千木ゝ八梅林よ
遠ゝれ八千樹蒼花雪のゆくよ聞き新月の山岳を照ゝり
と称ひ銀世界中水晶溪ゝ云ゝ梅樹の外ゝ八眼界よふ
ゝ玉ゝのゝ一筋の渓水八梅を流ふを清澄掬ゝ一杯
由よ告ゝ来を黎を耳を洗ふゝ和詩よ和ゝを孫を捧
ゝ屋を踏を聚し

青雲の物よ一ゝ春ちり 梅林

流よ沿ひ梅を迎へ梅を送りゝ嶺の流を玉ゝ月の漁村梅久
よ宿を投を庵厨の迎を患ふゝ旅宿元満越ゝ山ゝ

月瀬一望 米僊

果云是亦天地我庵之意
又云非解禅理者不能作此句又不能知此中味也
遂云奇警之悟
又云真情真句
錦云有此什而梅溪之乾坤特所謂動天之謂乎
遂云読者亦意動神飛殆如身在其中

一室の中を傳ひ携へる一室の燈を仰け杯友の来會を待
てと思ひ出を汲まんとす眠て夢よ天地の狭きを怪ぶ八
覺て世間のひろきを知る

ゆゆしくもあるかな八寛し　梅の花

二十七日晴鶯鳴早起窓を開き夜の明るを待つ

梅の中に西こうの花の夜の赤くうつるめ

梅溪八十三ヶ村あるに梅林の多きい尾山長引を以て第一
とす白梅枇杷卵嵩を以て之に亞く然せども梅溪の金
真を船宮に比べる月の瀬を以て第一とす夜八不のくと
明のく遠近を向雪の起るを見る梅花を見る岡の峰
妻宮の殺るを見る梅を見る葉を見る時よ収め天地狭
間に居ち風光清絶業の妻を求る非也

果云梅之与雪月写得逼真拙堂記勝不得擅美於前

遂云暗承閑卷第一句意自然炤應

雪を見るハ白ハさらしを吹の梅
朝炊を濃し　梅香野に満る是亦一佳光景なり委敷所延門
の三ヶ月記所の吹く梅ハ二分に別世峰に梅ハ盛に連る漢
ハ劉子隋郎の遊楽宮に共三千の佳人に遊て霞を拳る
仰ぐ〳〵よく風光を比喩しかの八余も悦豆の茅を着き紋
再月閑に家り山の半腹を下らんとすれハ計らずも数間低
士君白老仏塔の所の兩子を携へ来るに逢ひ
先逢ふて問ふん故郷の梅花　能秋
物告る　長　多　北麦　事　君白
云ふて神を知る名張川の岸に多り毎を見る水原に遊
らんとすれハ純朴なる壮士に尚を四し見ハ松友あり
所の見えて物あるに忘れけり　松友

心ゝ[illegible]まぬ友を得て　旅　船　秋

[illegible]士団水老[illegible]共に舟に乗て潮[illegible]
[illegible]に沿て遡り両岸の松竹は其[illegible]倒蘚て舟に松[illegible]
花上に拆ぬ怪石瓏岩出没左岩坪岩奇石あり此潮に
月の印る影の茂[illegible]を以て月の瀬と名あり今は俗
[illegible]村の名[illegible]ぬ身を松[illegible]に繋き服を喫き
る者あり看を食る者あり勾を吐く者あり
心を清くろはぬ友拾ひ[illegible]の清き[illegible]
[illegible]今舟を[illegible]に任して[illegible]
[illegible]此岩[illegible]拙堂翁の[illegible]
[illegible]や姫岩に過ぎ奴[illegible]より釜墨山の麓路を[illegible]
[illegible]と思ふ[illegible]社設墨式の清[illegible]は[illegible]

錦云拾実奪名豈啻月瀬而已

遂云真個別仙境光景

果云其然豈其然乎

果云余今春游月瀬帰途吊笠置古跡而遂無一句老兄則遊秩有此佳作吟了恒悦者久之

遂云仙界化為俗境同一梅花也而判聯間異其観如此花神有靈則應一滴暗涙以訴其俗了

錦云文明之殺風景

只彼の方を遥拝しつゝ
いまゝ[illegible]釜墨の山もめ[illegible]へよ

うゝ[illegible]まゝ[illegible]ふ来　[illegible]

[illegible]の海端より舟を岸に出を長引の山路より移を松樹を小
橋より柔を[illegible]き菓子を[illegible]の家毒[illegible]あり此山上の岩
句より[illegible]の[illegible]岩を[illegible]を[illegible]を[illegible]男あ
[illegible]此梅景を拾んと秦楚の岩を遠[illegible]枝を戎雅
士[illegible]を[illegible]へて梅を[illegible]姫[illegible]を争ふ[illegible]あり酒興に[illegible]
[illegible]梅を手折の暴[illegible]を[illegible]雅[illegible]あり花制の札
を立つる[illegible]日は酒[illegible]焼[illegible]梅[illegible]市街の如く
[illegible]葉[illegible]尾[illegible]を四[illegible]見[illegible]月の瀬[illegible]の梅林は遠
く[illegible]高[illegible]の[illegible]を[illegible]甚中に[illegible]釜[illegible]は

錦云這是風雅之殺風景

遂云悪吟粗句之纏梅花俗了極矣吾知花神蹙眉慼共悪因縁

草之光

を失なはんと思ふれば梅武士の憩ひを梅樹は屋敷擁して前面法を連り水青は梅香を除洗ひ庭苔の拂ひ法の秀吟粗句の別なく結ひ下ろす色紙短冊は壁ちまちまち七夕の作のみく詩家は弱なく歌は通るへうなる歌人は弱なく俳家は勇へうまとなぬ山うるよ梅香ちる屋うちを俳士は句なく俳は勇へうまとなぬ山うるよ梅香顔都ちて行人よ逼れて余を連日の拂を破ひ吟情の起ちまを山の寺は野は咲ます梅の花と蕾ち遺吟を手性の紙を裂き木葉ちを汚し梅樹よ動ぬは村よ之学院ふ峰ふ梵刹あり苔山陽翁ち永く拂を留めらまし愛ちを今尚存せりと云ふも晩鐘の拂を傳へむ為れは小郷ちを屋山を辞ち石坊ちを車を駐しを夜よ今夜忠よ帰り君白老ち回窟を

共よ来を切のん拂子の相海ち　宮白

そもしようけるを夢ひ自　彩　酔秋

鉄筆ち秘蔵ちる花蕉翁貴角嵐雪等の遺墨を奉ま掛けめ作祠は翁を拳し　拝ち携帯ちる変の水晶の香爐ち名を点を上し拝しを是を見ち蕉翁ち余の門ち入り名を点ふちは酒の碎のまれる男ち く梦中ち拂溪を見るのみは故を以ち拂梦ちを名つけを点めぬ

二十八日晴　拂翁の屋趾ち誘引せんと拂翁来ちを宮白老ち袖を引ち蓑虫庵ち為ちる此庵は上野市街の南極ち

日向町ち連接を芳祖翁は庵の閑静ちを愛し蓑虫の青きをきちち茅ち茅の屋の吟あるも今は庵の名ちをちめ翁ち法五芳ち郎ち住ちを変選し今は中村素の坊

蓑虫庵

蓑虫庵之図右

秋元喬知 雅房 白山居士 瘦梅

遂云冷熱易地雅俗顛倒所謂桑海之変不啻也一嘆

果云用蕉翁故翁二典信乎祐来自成妙文感服〻〻

有よ屋〳〵百姫思恵の命よ出産おの生徒数多を隔て丸八出産敷〻時ふ遊廓あり三絃八たえ声を費き紅袖八財〻耶よ鶏鳴芳閑静の尾小今八歌吹海邊の尾と為り蓑虫の音を聞よ東る俗人も多く夜雨を知〻て歌を為す詩賦も多く高よ入り家柱を又共八別取〻路あり時を尾主よ問ふ為蓑虫の遺吟を祖翁ら素然ふ如〻八是の柱為る安政色の為杖の為ら伝者ら別り取去る〻法せり時候惜む〻〻弟く八祖翁ら神霊の所為為ん〻〻且歌且笑を産ら祖翁自植の杉あり二百有余年の春秋を経て霜雪よ殺労為る為の姿も多く千尋の直幹八三抱を為よ〻〻一畝の清佐を占ら〻ん〻四時尾を為て時を為て枝ら為ら元禄の昔を追恵為る為情ら為を

錦云俳風衰態可想否其道熱中者之所為乎呵々

遂云此何者痴漢為這没風趣事

又云蓑虫之什果可招祖翁之灵

手芳い杉の〻の〻ら杉の根

蓑虫よ問く〻ん　芳野月よ生

演劇よ〻時来を得る伊賀越復讐の変ふを拵〻ん〻鍵孫の辻よ為る時変八家元御道よ〻〻二条市御の西の入口ら芳備前侯の臣渡辺数馬の家小文治の誉川合又左衛門を打ん〻て助太刀義末又左衛門僕川合武左衛門孫左衛門の四人〻〻鍵家の辻よ本望を遂〻ぬ寛永十一年十一月七日平天よ為き孫左衛門武左衛門を高槻を交け給よ治世武左衛門を今佛為よ葬り今尚石碑あり天心道秀信士〻法を忠死〻〻る孫左衛門の墓八見え〻〻る為〻仇〻る又左衛門の墓八萬福寺よ存在世呈芳より君父の讐を報せ〻〻忠臣孝子八多々世〻〻

錦云有雅趣有活歴史此篇不可不読

の姿を彼せしハ景めつゝきもゝ多ゝ度攻殺深を第ハんゝ愛深町の愛深院より多ゝ竹林の庁隅よりきき芳香しゝゝる所あり芳を掬ひて視せ不芭蕉庵掃着法師と大字より刻しゝ出せハ是ゝ〳〵祖翁の塚なりと香花を高敬拝 時をうつゝゝ多ゝ過ぬ

ふゝ ねむ鄭なきゝ ゝ ゝ 春の雲

上野公園より多ゝ公園多ゝ藤堂家の屋敷郭多ゝ芳翁井順芳ゝ築ゝ安ゝ住宅の石畳ハ千仞の岩壁の如く外濠を巡りて沼ゝ流ゝ湯ゝゝ深き百尺見を望めハ幾ゝ競ゝゝゝ那廣ゝ栗柱を立て東北ハ樹木森ゝゝて天を奈し天王寺ハ巍ゝゝ雲ゝ入ゝ登りて見せ不指先岐阪の杉を盛のめく青ゝ北川の流ハ常のめく白し 春敷の村

錦云領声併悲想

落ハ眼下ゝ拡ゝ防禦屈竟ゝ千軍を絶り万馬を入て多ゝ水ゝ多ゝ岸ゝ岸へ〳〵はおもゝ〳〵ゝ塚郭ゝ今ゝ花を多ゝ安ゝ公園ゝ多ゝ逝ゝ春の後さるを多ゝ彼の諫敷芸ゝ ゝ 勢おゝゝゝゝ 森ゝ多ゝ明治の今日服ゝ多ゝ過りぬ又翁ゝ壮年の芳ゝ住ゝ屋敷ゝ今ゝ田畑ゝ東を袖拂の如く拡ゝ彼ゝ霜ゝ生ゝ住ゝ異滅ゝ多ゝ色

業平ゝ家ゝ 咲や ゝ ゝ 春秋

二十九日晴小田村ゝ醫森元章氏ゝ招ゝ傳行丸霊と呼ふ別亭多ゝ窓を穿き見せハ瓦光ハ天王寺ゝ相似て美既緑あり先摂州の酒樽海の魚を以ゝ餐を一杯ハ人酒を香ゝ二杯ハ酒酒を呑の期ゝ多ゝ源言ゝ高ゝ思ゝれゝ

遂云与月瀬之氷肌玉骨其賞心如何

錦云酔此佳人酔彼佳人深與可想

遂云亦一奇亦一笑

栗云此一段余自趙師雄脱胎来殆有出藍之妙

嬋娟たる令孃来て興を助く姿ハ春月の梅にみるか如く媚て
秋水の蓮に似たり酒杯の献酬翼萬の琢より聴く一篇の詩ハ
あたかも李白か出てきたる体飲みせし給ひ酒人を呑むよふ
玉山の倒るゝ如く知るを梅夢猶泉中に倒しし彼劉玄石
か如く醒さるめく梅夢の酔ハ泉水に流されて令孃の容動
只あかつきまて続けて梅夢主人に問ふに主人笑て答ふる彼ハ
当地の舞妓なりしく酒興に深き令孃ときゝ時是を
知覚せさるのみなき八全く破晖迷酒に呑まれしなりん余も
き酒を呑まさる私は是を悟らさる八月の瀬観梅の酔はい
あらく嗟さらあらんとして大笑したりき
其夜は名の本杉渓子余か旅宿を訪ひ名月瀬にて得る所
の句を以て梅花ある事の佳詠を聞き既に沈吟せし哉

宵寒く夢を見てさきほと鶏鳴を過き後ちゝしめ枕にて
夜に破ける夢のあし梅の錦世界　聴秋
梅が香や枝長別の風寒し　月水
霜にして深けに出来て気う梵林　古月
梅か香に別れ惜しる山路かな　杉渓
うかれ来ぬ心の情を起こす寒　杉左
梅ら香に酔ふてきたりゝ酒の酔　梅夢
廿六巻八別に桜木に鏤めんとせし思ひあれハ数句のとゝ記
三十日晴　月水杉友の雨宮八初瀬に帰んとて別れを告しむ
鶏鳴き是や別れ　杉左　宗　司詠
名残きしゝ　吸む　聴秋
日曇信樂に秋庵に戻り社員来會し杯を取て八月瀬

長明記行文ハ

果云猶詩以咏梅花者無不歩林高後塵也欤

又云是之謂直紀行又云老兄亦学荘周欤

梅の清香を送きあらしを拭ひ祖菊古園の変遷を
話しつゝ夜の更るもさらぬ

三十一日雨晴日病床よりあの〳〵耳目ハ弱し愛を僧ら
記さんと筆を取るもとゝ道の記とふ名ハ紀行長
明師傅尼の文を摘ひ情を尋しとより時其嘯弱を改
る能きと雖蕉翁も云せしるめし況や月侯ハ拙堂翁ら
満腹文学の力を以て振ひ起さる記録あり月侯の梅林
を翁の文章ハ題出翁の文章ハ月侯記録を以て嘱る
余のめゝ浅学短才の歩を安ハ非さ処ハ勉て文章を
綴ら事言語を粧ひ事を賠日ハ雨今日ハ晴茲ハ山彼ハ
川と只耳目の弱しるまを筆ハ任せんと世しも
病者ハ依りず途さしく筆を拙ち草〳〵しく眠を

八幡とあらて盆載の義ハ戦を或八勝ハ楽しく月の
世界ハ趣ひ肉体の及ぶる快楽を為せり千秋庵主余ら
病体ハ法然を繕て

只さんも此山里を尋ねる　面　駝松
蕚て　黄　雪　梦ハ拙う　駝秋

四月一日雨病の快〳〵さるまより駝松及母文を等の
看護を得て病を養ふ駝出家都より雨を冒して来る
ハ社設置の準備を談て夜ハ入り床あらう眠をあく
眠る

遊云此中寓諷刺意存之亦可今附抹殺何也

果云此夢是何夢為蝴蝶耶花耶将乗鵬遊月宮耶惜墨塗抹殺不能知也

[redacted]鉛燈明滅枕頭に消残り瓶
梅一枝の清香に墨るありて初て師雄の夢さめたるを知れり

二日雨早天杜負ハ杉月古の野中の清水に比すへき菜石を携来りてハ古れを賑する年後来雨の晴まつ任ふ病すら快気の思ありしハ属ささりし変の物を揮毫されたる事あり　邹一氷ヶ甕

果云三四唐音又云聞蕉翁杜甫集与西行集常携之君亦以非漫然作詩者用意之深可以見矣

此業も脩めまく疎き病中の拙劣只責を防くのみ或ハ詩歌をさたふ者あるとをきよう左道ハ部されとハ固く辞せられ許されし彼地ふみて思ひしまをかいつ寄てやりぬ

宿望十年遊月瀬尋春旬日洗吟腸満山梅樹白於雪
銀世界中人踏香

月の瀬は名をくみしぬもの
峯も夜もありきゝ下路

立なふ山のあかりゝ梅河ゝ
吹真に風の知らせぬるかな

此夜俳楽の俳人梅下孫梅枝社負とあるか露公務の余暇なくしてまかる雨を衝て来る

三日晴祖翁肖像を床にかかり清山の珠味を借し杜負来

會分社發墨武を行ひ俳諧よこのうぬ

是この頃の貴船に是を蒙招分　駒秋

めくこと深しこと変る事　面

飛ふ乙鳥ふ　雲居

ふらふ　吟雲

名月を　星と　芋ふふつ　久美

生壁　ふ　の　秋　ぬ桜

立春　歌　よむ　緑　杉自

ウ　芳子

ふ　俤　と　酒　ゆふ　松旭

ふ　髮　ふ　俳　有　月

俳　ふ　翁　ハ　神　も　樹　松林

打　指　ハ　本　の　禁　の　ふ　少碩

雪　氏　ふ　月　雪　駒松

牡蠣　母　ふ　遠　雪

軍　を　ふ　を　角　ふ　て　鄙　る

茅　名　大　茅　坂　を　ふ　ち　を　八重町

梁　ふ　い　を　い　の　角　鈴　る　桃枝

聞　き　る　茅　ふ　の　茅　を　ふ　ふ　ふ　け　を　鄙　生

春　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　駒　出

俳　徘　を　時　霧　ふ　俳　を　坂　ふ　ふ　坂　駒　出

四日　鶏　時　駒　出　早　く　起　き　雨　戸　を　ふ　く　茅　ふ　庵　茅　ふ　白　雪　の

降　積　り　を　る　ふ　茅　ふ　き　住　景　ふ　り　を　報　を　る　鶏　ふ　忽　夢　を

め　臥　坂　の　ふ　ち　ふ　ふ　ふ　首　を　回　ふ　を

茅　ふ　い　ふ　名　を　降　埋　む　深　雪　れ

四代　名　多　羅　尾　氏　ふ　招　を　ふ　を　ふ　い　く　つ　き　有　を　以　て　解　を

面　を　智　を　以　を　迎　ふ　詹　志　を　謝　し　是　ふ　無　を　ふ　る　稜　茅　逝

御　茅　の　文　香　ふ　を　諸　侯　ふ　駒　を　る　霊　茅　ふ　庵　ふ　豊　臣

大閤の多羅尾氏の祖先へおくり給へる紙冊あれハ茶の湯の

あるのめでたるよ幾ときよりの吹ときぬ　秀吉

たり者ハ湯を雪とそゝんん

傷ハ半弓あり徳川家康公大阪陣ハ携帯せらるゝ後

多羅尾氏の祖先ハ彼ら世ゝ伝ふる品あるとを加ふる事ハ特有ハ

る品を視を得ん幸福と云へ

梅ハ〳〵雪とそゝあるを居在ハ　ぬ梅安

園も炉　裏ハ　ぬ　事　ゝ　脆　秋

香爐峰の笹ハ比をへき家を聞く才女あり玉樹ハ祥を

呈〳〵俗山ハ瑞を歌〳〵仙家珍味ハ〳〵凡常を錬〳〵

基氏ハ尾丁を拋げ舎を〳〵〳〵梅を把る風光を賞〳〵

醉ハ事〳〵を倣句を吐く梅ハ孔雀とし梅ハ紐を解んとす

遂云是亦一奇観其得意可知

果云天呈奇景似助君餘興者

又云用紀氏土佐日記文取束有力

る事和駱蕩の時日ハ寒り大雪霰雪より保き八余ハ日瀬梅

溪ハ沈溺〳〵を勝ハ髮二ハ時ハ〳〵〳〵天降〳〵自の漸

梅溪の銀世界と奏逸の光景を年二て是を見ん〳〵

あのく〳〵ハ雪ハ弱ハ変ハて祖翁の遺跡ハ〳〵帰路の趣

倒ハ省ハ一ハ字〳〵ハ和歌ハ〳〵この足ハ十ハ字ハ踏て帰ぬ

ちろ物のハ〳〵ハ雪ハ保生ハ雪ハうへ

五日　半時ハ秋尾ハ於て送別の宴を開き社員来會〳〵且酌

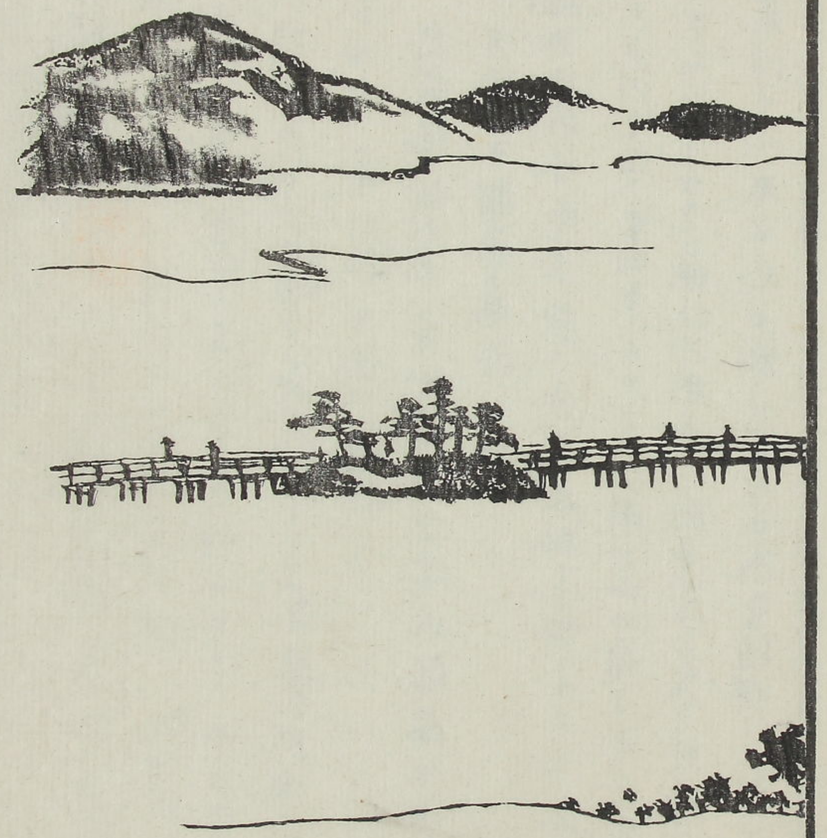
且談ハ風林の秋酌ハ甲越の兵を使ふ後〳〵余の前ハ来

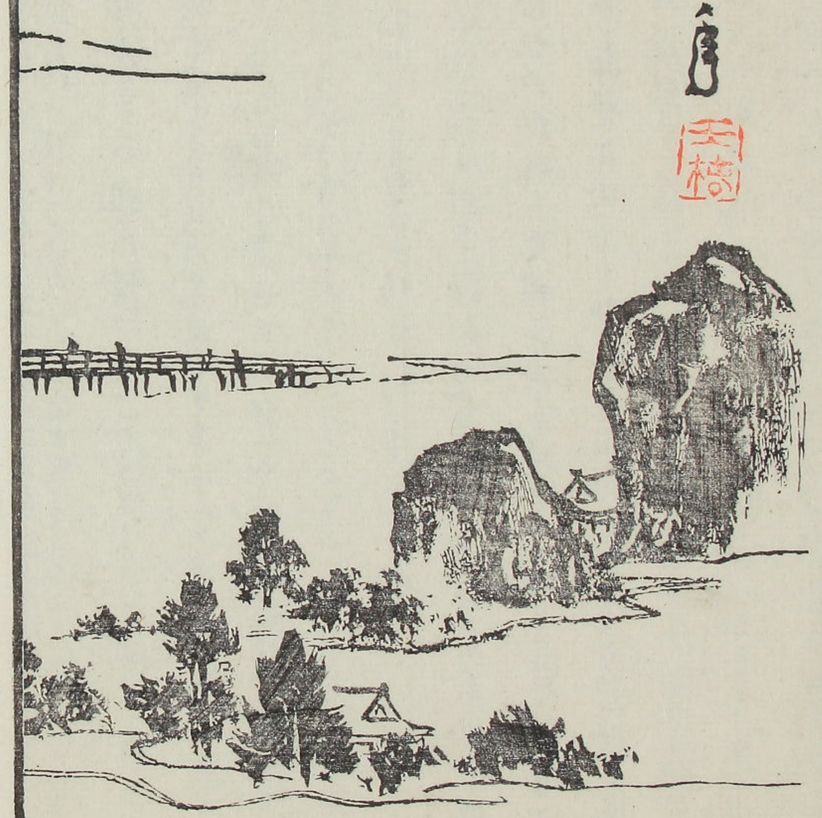
ぜハ遠慶ハ面望ハ均〳〵ハ動〳〵ハ脆松の北堂ハ三弦ハ憶ハ

星妻女ハ琵琶ハ精〳〵ハ阪ハ一曲を奏ハ二十五絃の夜

月ハ〳〵ぬハ妙技清ハ音を変今ハ帰らんとハ事ハ

廻ハ〳〵めんハ〳〵ハ況ハ人間の酒宴ハ清ハ音を以て聊〳〵ハ





果云真率有味

卓之巻

伊人ゝ陶然と大孫せきこん

六月晴余を見送らんと社員八人を別を惜む比旬日の清趣

よ伝藝を洗除し一家よ家あるも忘れ新よ旅をさそふの思を

多八金く社員のあるゝあるゝさる交際よ出るゝ謝を豊花八月

の漂泊もいとつきあるのより果さるを憩ふ更明来八芳神

行を約し二十八字を賦して贈る

交情密似山雲密離恨深於海浪深孫約明年遊

吉野木朝花裏爽芳心

朝藤の山岳を登と昔よ多羅尾村を辞し不動阪の峠を

越へ大戸川を渡り黒村を過ぐ夕陽八國分山の嶺よあるて俳田橋畔

を思出を見て幸ゝ樂む三井寺八遥よ遥ゝ石山の晩鐘よ送ら

せ粟津の晴嵐よ衣を翻し近江市廛を遍拝し鈴の宮者をは

錦云観梅不飽梅見月慾更覚風流之真趣

果云嫦娥亦應喜君風流不啻花神也

この労もなく黄昏逢阪山の寒路山科の里をおりるき日の暮を月

よ越へ家五産よせんと路傍の梅花よ近つきて

折この枝を日よ手を引く梅花

家歩脚虫を伴て尾よ帰る吟よ美頃山科よ風よ

折ゝ枝ゝ来よ初更を撰しぬ

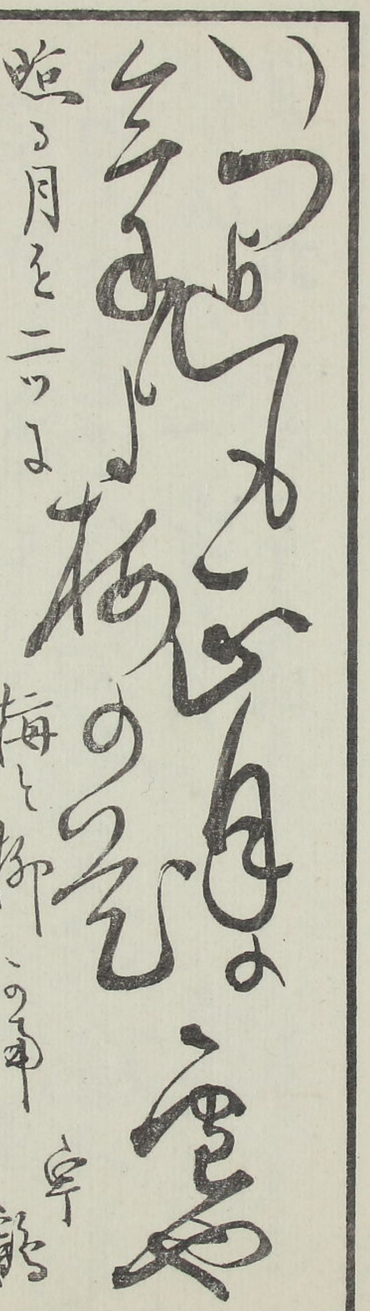
梅ゝ来北庭ゝ近ゝ旅ゝ絵ゝ　駱駝

雪ぬ来ゝ和ゝ更ゝ来の夜　素麺

柴の戸を吟て絵ゝ来の風　芋栗

只梅ゝ来ゝ来ゝ耳を去産　駱虫

十月　妙法山人毒批



昭る月を二つよ　梅と柳　この中　宰鄙

梅は雪をまとわりて香を深し　柳芳

客を待つ月の方と棟　雅意

賜の方のかすみ　梅の花　水琴　晴嵐

柳は枝は雪をまとわりて　柳

丁亥十月如意山人妄批

此一篇所主乃在覩梅故中間極力寫其乎神寫其風采描其韻致描其雅趣將梅花真髓自在翻美殆無餘蕩一讀之下覺字々皆香時丁亥之冬十二月於皆夢樓上鈍散史妄批多罪

梅微笑之處遂軒散史妄批多罪

聽秋老兄与余先人大梦有舊一日余隨谷如意翁過其東山不識庵聞有月瀬紀行上梓之舉心大躍之翌者兄袖此巻来過余廬使余强評之父執之請不得辞乃付一二評語於欄外還之余於俳句固為門外漢請裁取焉若夫老兄之才之與技則如意翁序文已悉之矣

明治丁亥冬月　辱知　果齊小川泰拜識

梅ありや月ねむる小鳥の毛色かな　耕雨

志ら梅の匂ひよ

うごくとみし柳の路　柳しめ

梅白し月も雲まで隠れ家に　月主

舟て行く鳥も歩いりゝ梅の花　藤濤

月みえて見えぬ花は苦しみ梅の花

白ひかり　歩月

月と梅直ぐみ逝き　淇園

庭もせに梅の白さあし梅の花

草かき也をのしまむ新歌舞梅花童　香以松

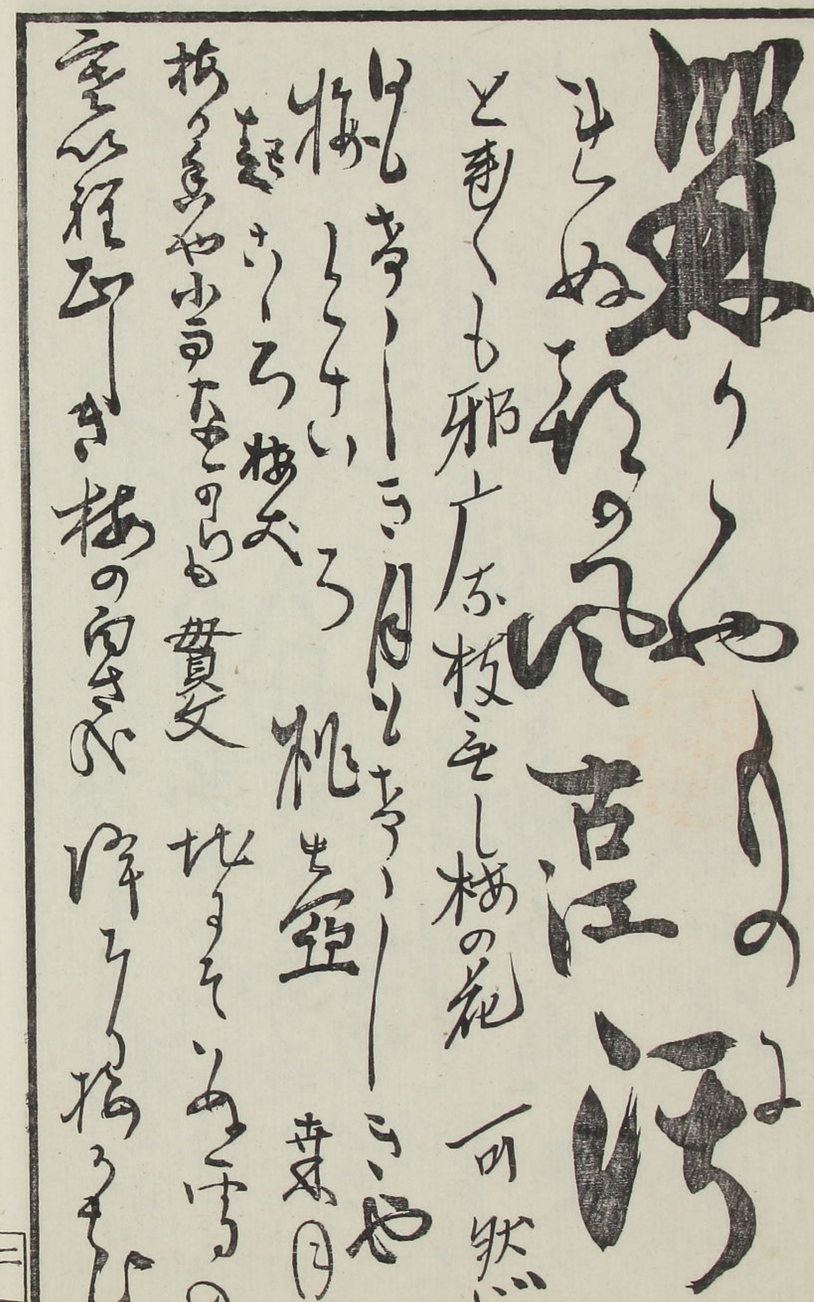
和鶴の年寄の梅の香

香みくもる宵槽りし月の　華粟

籬屈そ枝々に野に添ふ　吉鐘

一声や梅の花　快

支度年様の歳末　静


梅の花
可然
桃李園
菜月
梅の白さ
降る梅

冥土風呂
御庫家臣
松子

[illegible]

梅の香に借りもよし　長流

梅ヶ一輪　実ってもよし　彩海

[illegible]の流れ　沈雪

[illegible]本に業も禁や　梅の香　鏡花

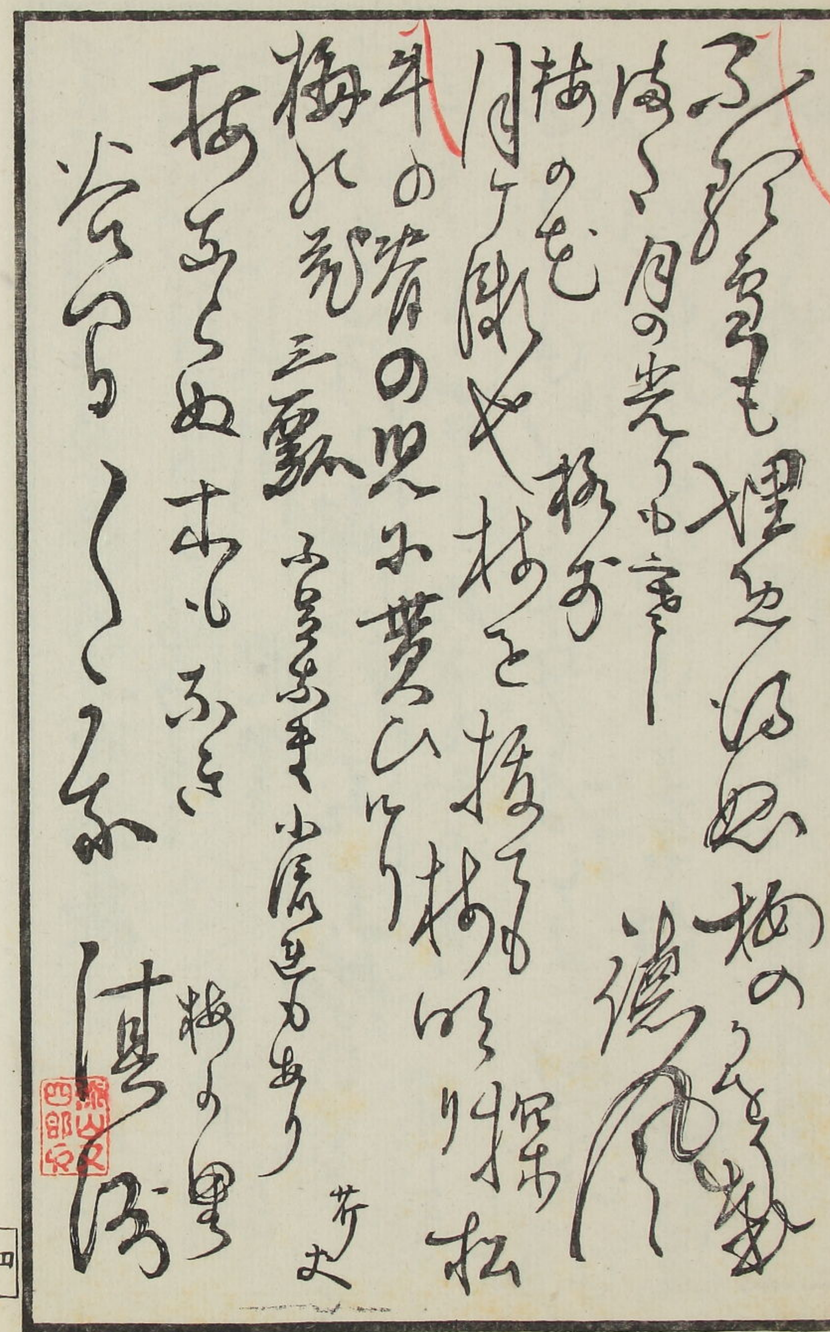
[illegible]の月　只て廻る梅ヶ　自閑

[illegible]寒さを忘れけり

[illegible]の[illegible]や梅柳　利舟

[illegible]　梅の[illegible]　青藤

[illegible]　梅の[illegible]　宋長

[illegible]　[illegible]　素白　概置

[illegible]　[illegible]の雪の[illegible]